

令和4年1月4日

田川地区斎場組合
管理者 二 場 公 人 殿

田川地区斎場組合
場長 松 崎 紀 公
事務職員 崎 川 瑛 一

出張命令復命書

下記のとおり公務出張したので、復命します。

記

1 目 的

田川地区斎場の新設計画に向けた先進地視察

2 視察日時

- (1)令和3年12月21日(月) 午後1時から午後3時まで (佐伯市)
- (2)令和3年12月22日(火) 午前9時から午後2時まで(延岡市)

3 視察先

- (1)大分県佐伯市火葬場 紫翠苑
- (2)宮崎県延岡市斎場 いのちの杜

4 視察内容 延岡市斎場 (別紙資料を参照。)

(1)建設事業費について

- ①総事業費22億9000万円。
 - 建築本体工事費(延床面積 3,370 m²)12億6300万円
 - 火葬炉本体工事費(7基+胞衣炉1基)2億2300万円
 - 土地造成工事(土地買収費を含む)4億1400万円
 - 設計調査費(監理等を含む)1億2700万円
 - 外構工事(公園、駐車場整備)2億6300万円

②事業の財源は、国の合併特例債を活用し、合併特例交付金(5.44%)、合併特例債(91.85%)、自主財源(2.71%)でありました。

(2)意見交換(延岡市担当課職員2名が対応)

①建築本体の建設について

○「命」をテーマに、住民感情へのアプローチから「命に対する想いを深めていただける空間と時間」を提供できる「ゆとりのあるスペース」を確保したが、供用開始から10年が経ち、建築物の維持コストやメンテナンスを考えると現実的にはコンパクトでシンプルなものの方が良かったと感じているとのこと。

○特に火葬棟の建物は天井を高く建設したため、空間的には見栄えも良いのですが、高所作業となる照明器具の取替が現場スタッフではできないため、専門業者に依頼することになり、経費が高くなるデメリットがあるとのこと。

○「命」をテーマに地元のアート作家に作品を制作、展示しているが、空調管理など、維持管理が大変であり、高価な展示物は避けた方が良いとのこと。

②火葬炉設備の導入にあたって

○延岡市の場合、周辺環境は山林であり、近隣住宅もないが、環境保全から防塵、無煙無臭の必要性があり、設備費用は高額となるが、将来性も鑑み、排煙設備はバグフィルター方式を採用したとのこと。

○排煙設備をバグフィルター方式にしたため、外見は2階建てであるが、実質的には建屋が3階建ての高さが必要となり、建設コストが高くなるデメリットがあるとのこと。

③財源面について

○延岡市も近隣2町との合併を期に「合併特例債」を活用できたことから、新設を計画できたもので、自主財源だけでは、出来る施設ではなかったとのこと。

○問題として、旧斎場施設の解体については、財源的に1億円以上の経費に係ることから、いまだに解体への着手に至っていないとのこと。

5 所 感

延岡市「いのちの杜」は、広々とした自然豊かな山々に囲まれ、近隣には海水浴場も近く、猿や鹿などが敷地内の公園や駐車場で戯れているなど、近代施設でありながらも自然を感じられる立地にあり、「霊柩車到着から火葬までの一連の作業を見学」したが、深い悲しみで訪れる利用者には多少なりとも「心も和む」すがすがしい環境にあるものと感動しました。

○火葬棟での建物では、天井が高く各スペースも広々と作られており、利用者には大変良いと思いましたが、空調設備や照明設備に要する維持コストや清掃管理が大変ではないかと懸念されます。また、玄関ポーチ天井の雨漏りが使用1年目から発生し天

井が一部脱落しておりました。雨漏りの箇所によっては、火葬設備の故障を招く可能性があり、重大事故に繋がるため危険と感じましたので田川地区斎場が計画する場合、丈夫な作り且つシンプルであり、維持管理のしやすさが重要かと思えます。その上でデザイン性も付加出来るのであれば尚良いと思えます。

○待合棟での建物では、デザイン性から天井に採光採りを付けていたが、こちらも雨漏りが発生しておりました。腐食による天井落下等を避けるため、LED 照明等での対応が良いと思われます。

○火葬炉設備では、排煙設備はバグフィルター方式を採用しており、非常にクリーンではあるが、設備費が高額なうえ維持コストも高く、バグフィルター本体も大型のため建物も必然的に大きくなります。また、いのちの杜のように2炉に1基のバグフィルターの場合は、2炉を同時に使用するとバグフィルターに負荷が掛かり故障の可能性があり使用できないため、田川地区斎場が採用する場合は、1炉に1基のバグフィルターを設置するか、2炉に1基のバグフィルターを設置するか熟慮すべき点だと感じました。

6 田川地区斎場を新設する場合の提案事項

- ①火葬棟玄関のエントラス・ホールを無くし、車寄せポーチから告別ホール(2室)、告別ホールから炉前ホールと続く人流スタイルとし、建築面積を削減する。
- ②炉前ホールの天井の高さと広さは現状と同じ程度を確保し、建築コストを抑える。
- ③火葬炉の設置基数を5基とした場合、火葬件数が多い日にも対応できるように炉内台車(火葬炉基数と同数の予備台車を別途に確保)収納スペースを設置する。
- ④収骨ホールなど余分なスペースが削減できるよう人流を考えた設計とする。
- ⑤採光用の天窓は雨漏りの原因カ所となるので、炉前ホールなどの採光が必要なスペースは横壁のガラス窓や照明で確保する。
- ⑥今後、独居老人が増える傾向から霊安室(柩保冷設備)を兼ねた告別室2室(有料)を確保することが望ましい。(既存の収骨室と同じスタイル)
- ⑦洗面室や授乳室は「ゆとりあるスペース」を確保する。
- ⑧待合室は、地域のパブリックステージとしての機能(大規模災害時の待機所等)を持てるように洋室のみとする。
- ⑨待合室は、定員24名収容の4人掛けテーブル設置が理想。
- ⑩大規模停電等に備え、大型発電設備(屋外)を設置する。
- ⑪屋外庭園に馴染んだ無縁納骨堂を整備する。(市町村の無縁納骨堂を兼ねる。)